

## 水仙月の大雪

真冬の日本の姿を上からみると、背骨のような脊梁山脈が列島をつらぬき、日本海側の雪雲と太平洋側の地方の晴天とを天地境界ごとくわけている。立春が過ぎる頃ともなれば、さしもの真冬の寒気にも「瞬のひるみ」がでる。その隙をついて春「一番」が日本海を駆けぬけ暖かい南風を誘い、南海上を発達しながら抜ける低気圧によって太平洋側の雪なしベルトでも時ならぬ大雪をもたらす。

およそ百年間の観測記録をみると、終戦間近の昭和二〇年冬は記録的な北陸豪雪の年であり、珍しく太平洋側でも大雪となっていたのが目に付いた。この年、最深積雪の第一位の記録が九州から瀬戸内、そして関東一円から東北南部まで広がっていた。B29の日本本土への空襲が本格化するなかで、一月の下旬、南海上を発達しながら通過した二波の低気圧の襲来を受けて、日本列島は白「色」の世界となっていた。焼夷弾で空襲するB29から密集した木造家屋を守ってくれる厚い雪のマントを自然から送ってもらった格好となった。一月二三日に降った雪は神奈川県茅ヶ崎で五三センチ、甲府で四〇センチの大雪となり箱根から関東一円に最高で七〇センチに達した。三日後には追い討ちをかけるように二波目の低気圧の通過で、暖かな三宅島での四四センチをはじめ、九州東岸でも一〇センチ、広島二五センチ、横浜四四センチなど太平洋雪無し

ベルト地帯が次々に大雪に覆われた。数日前の大雪がまだ解けず残った上にさらなる大雪が重なり、ついには神戸一七センチ、横浜四五センチ、水戸三三センチなど最深積雪のワースト記録を作り、この記録は現在なお塗り替えられていない。

最近の春の大雪例は三年前の九四年一月、建国記念日に首都圏に三〇・四〇センチの大雪が降って交通網が寸断されたのが記憶に新しい。雪「色」に塗られた都会では、雪を追いかけてきた背後の冬の寒波で路面が凍り、転倒やスリップによる交通事故、交通マヒなど都会型災害の後遺症に悩まされた。記録をみると昭和二六年の一月二四日、同じように南岸低気圧によって東京に三〇センチを超す大雪と珍くも猛吹雪に襲われていた。都電が止まり国鉄や私鉄の電車も軒並み部分運休してしまっただけでなく、二・二六事件の時も大雪の日であり、東京の最深積雪の第二位の記録四八センチも一八八三年の二月八日である。一月だけでなくときには三月でも大雪となり、江戸時代に井伊大老が暗殺された江戸城桜田門外の変や十年ほど前に神奈川県厚木で、暴風雪と電線着雪によって送電鉄塔が倒壊しとなつて大きな停電事故となつたのも南岸低気圧による彼岸の大雪だった。

日本の空は季節を問わずに主に冷たい雨のメカニズムで降ることが多く、上空の雲の中は雪だらけで、雪が融けて降れば雨、解けなければ雪となる。上空の微妙な気温の違いで春雨ともなり春の淡雪、ポタリ雪ともなる。平地が雨でも標高の高い峠や山では気温が低いので雪とな

る。早春の雪は冬の名残りとも春走りの接点でガラス細工のような微妙な条件のもとに降る。関東平野は北からの寒気が残りやすく、南海上の低気圧からの暖かく湿った気流の触れ合いで、雪となる絶妙な位置にある。

「カシオピア もう水仙が咲きだすぞ

おまえのガラスの水車 きつきとまわせ」  
厳しい寒さで堅くしまった輝くばかり白「色」の丘を舞台に、冬に君臨する「雪婆ん」とその号令で動く「雪童子」と「雪狼」とによって、冬の名残りとして早春の吹雪を「一杯に吹かせ、その丘を越える」少年を描いた宮澤賢治の小品「水仙月の四日」という名作がある。

群青の空から降り始める白い雪をさざなみのように降らせ、ガラスの水車」という天空の雪を大型製造機を設けて吹雪を送りこむ仕組みを作りだす芸当をした。ザラメの砂糖を熱で溶かしながら遠心力で吹き飛ばして、白い繊維のようなふわふわとしたワタアメができる。このアナロジで「アルコールランプ」を熱源に「ガラスの水車」で作られた吹き出された雪は、水と水蒸気と雪の結晶という相変化のなかワタアメのごとく製造され白い台地に降り注がれる。白い羽根毛が舞うように早春に「ピタリ」の情景である。

赤いケットに身を包んだ少年は吹雪に迷いしだいに雪に覆われてしまう。だが「雪童子」は少年に「今日はそんなに寒くないだから凍えないよ」「動いちゃいけない」「布団（雪）をたくさんかけてあげるから」と雪の保温効果を語らせ、吹

雪の止んだ早朝に風を吹かせ雪を払い、赤い毛布の一部を雪からだして救いだせるようにした。早春の吹雪というモノトンの世界に、光と青や赤の色を鮮やか折り込んだ童話である。立春がすぎて真冬の寒気の名残と春の走りがせめぎ合って作り出す自然の精緻さと素朴な風景を静かに味わってみたい。